

ほのか診察室

HONOKA Consultation room

シリーズ

第104話

聴力検査について



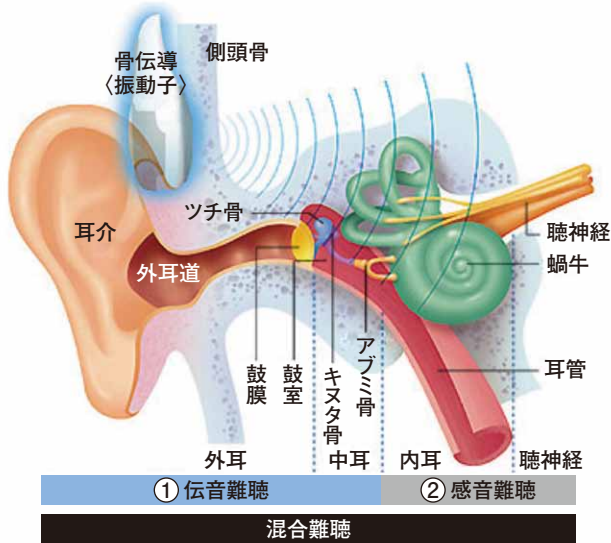
市民病院 診療支援部
臨床検査課 監修



聞こえが悪い、耳鳴り、めまいなどの症状で耳鼻咽喉科に多くの方が受診されます。聴力の程度、難聴の種類を判断するため、聴力検査は真っ先に行なわれる基本的な検査です。今回は耳の構造、難聴の種類、検査方法について簡単に紹介します。

● 耳の構造とはたらき(図)

耳は外側から外耳、中耳、内耳の3つの構造に分けられ、一番内側の内耳から脳へは聴神経でつながっています。外耳は耳介と外耳道からなり、外耳道と中耳の境界に鼓膜があります。鼓膜は音により振動し、鼓



● 難聴の種類
外耳に入った音が脳に達するまでの、どの部位に病変があっても難聴が発現します。難聴は、外耳から中耳までの伝音器に原因がある**伝音難聴**(図の①)や、内耳から脳までの感音器に原因がある**感音難聴**(図の②)、伝音器と感音器の両方に原因がある**混合難聴**に分かれます。
伝音難聴は音の振動が十分に伝わらない状態で、外耳道の閉鎖、鼓膜の穿孔、中耳の炎症、耳小骨の異常などで起こり、感音難聴は内耳や聴神経の障害で、メニエール病、騒音性難聴、老人性難聴、突発性難聴、聴神経腫瘍などで起こります。

● 聴力検査の方法
聴力検査は防音室の中で行い、どのくらい小さな音から聞こえるかを調べます。検査には気導検査と骨導検査があり、気導検査はヘッドホンで音を聞き、骨導検査は振動子を耳の後ろにある骨(側頭骨)に当て、蝸牛へ直接音の振動を与えて聞き取ります。2つの検査を組み合わせることで聞こえ方の程度や難聴の種類が分かります。
どちらの検査も「プツ、プツ、プツ」という音が聞こえたらスイッチのボタンを押し、聞こえなくなったら離します。高い音から低い音まで15分程度かけて両耳を検査します。
難聴は高齢者の病気と思われがちですが、若い人にも起こります。ヘッドホンやイヤホンのボリュームを上げて長時間音楽を聞いていると内耳の細胞が傷つく感音難聴(ヘッドホン難聴)や、若い女性に多くめまいを伴う低音障害型感音難聴、突然聞こえにくくなる突発性難聴などです。
症状が現れてから治療までの期間が長いほど聴力が戻りにくいため、聞こえ方に問題がある場合は早めに受診してください。